

人文社会科学部後援会事業実施報告書

申請者氏名：伊藤哲司

申請 No. 1-1（事業費）

事業区分：学生の教育研究活動支援

対象学年：3 年次 7 人 4 年次以上 7 人（うち支出者 14 人）
（このほかに学部研究生 1 人が参加）

内容

報告項目：伊藤哲司ゼミ合宿（2024 年 8 月 27 日～29 日、於大子町）

報告内容：以下に記述

令和元年東日本台風被災地におけるナラティブ展示企画を中心としたゼミ合宿

現代社会学科国際・地域共創メジャー教授 伊藤哲司

1. ゼミ合宿のねらいとテーマ、準備状況

気候変動などによる環境の変化が、私たちの生活にも大きな影響を及ぼしつつある。自然環境の変化により敏感であると思われる中山間地域の町では、その影響はどうだろうか。そのことを大きなテーマに据え、5 年前の令和元年東日本台風被災地のひとつである大子町を訪れ、インタビュー調査をもとにしたナラティブ（語り）の展示企画を実施してみることにした。同時にそのための方法論を学ぶことも意図した。ゼミ生たちが選んだ大子町に出向き、2024 年 8 月 27 日～29 日にゼミ合宿を行った。

大子町は、指導教員の伊藤が、長年にわたり関わりを続けてきたフィールドである。合宿係となった 3 年生数名を中心に準備を進めた。できるだけ多くのゼミ生が参加できるように日程調整を行い、留学中であることなどやむをえない事情で参加できない 5 人を除き、15 人のゼミ生が参加することができた。

ゼミ生同士の親睦を深め、より深い関係づくりすることも、今回のゼミ合宿のねらいである。一昨年度、3 年ぶりに対面でのゼミ合宿を行うことができたが、それと昨年度のゼミ合宿に続くものとなった。コロナ禍がほぼ明けた現在、当面はこのゼミ合宿を毎年継続していけるだろう。この機会が、その後のゼミ運営に好影響を与えることは間違いない。

2. 大子町におけるナラティブ展示企画



川の記憶とまちづくりのナラティブ
Visual Narrative Mapping

2024 8/28 (水) ~ 9/18 (水) 午前9時~午後5時
大子町文化福祉会館「まいん」 観光展示コーナー

ワークショップ『この川このまちの思い出』
9/1 (日) 午前10時~正午 観光交流ホール

2019年10月、台風19号（令和元年東日本台風）により、大子町の多くの住宅や事業所、農地、鉄道は大きな被害に見舞われました。
私たちは地域の方々のナラティブ（語り）に耳を傾け、時に語り合いながら、川と共に生きる人々の水害だけではない「川の記憶」と向き合ってきました。
水害をきっかけに出会った住民と研究チームが3年間にわたり共有したナラティブや活動について展示することを通じ、まちづくりと防災のこれからを考えるきっかけとなることを願っています。

主な展示内容 大子町住民の語り 今昔写真パネル 語りマップ

主催：茨城大学人文社会科学部市民共創教育研究センター
共催：つどう つながる つむぎだすラボ／茨城大学人文社会科学部社会行動論ゼミ（伊藤哲司ゼミ）
後援：大子町 協賛：常陽銀行
お問い合わせ：tetsuji.ito.64@vc.ibaraki.ac.jp

伊藤が中心となって 2019 年以降積み重ねてきたインタビューデータを用いて「川の記憶とまちづくりのナラティブ」という展示企画を行った。場所は 大子町文化福祉会館「まいん」をお借りし、ゼミ合宿期間に展示準備をゼミ生たちが中心となり行った。ゼミ合宿終了後も展示は続き、9 月 1 日にはワークショップ「この川このまちの思い出」を開催し、複数のゼミ生がその運営を直接現地でサポートした。「ナラティブの森」と命名した手法への関わりは、ゼミ生たちにとっては 2 回目のことであった（前回 は同年 5 月。茨城大学図書館展示室において）。この企画自体をゼミ生が積極的につくりあげたというわけではないものの、このような手法を用いた地域での展開の一端を学ぶことができたであろう。

3. 課題と今後の展開

宿泊した大子町町営研修センターは、元大子第二高等学校の校舎を活用した施設であり、かつての教室を半分に仕切ってつくられた宿泊室を、快適に利用させていただいた。安価で宿泊させてもらえるのも、大変ありがたかった。

インタビュー調査の方法論を学び実践するという点についても、ひととおりのことはできた。ただし、その理解を深めつつやりきったという感じのところまでには至らなかった。3 日間という時間の短さもあり実践としては十分ではなかったところもあるし、今回掲げたテーマにゼミ生の関心が必ずしももともと強くあったわけではないということもあったのだろう。ナラティブ展示企画についてもさらに十全に実践し、その意義を理解してほしいというのが、担当教員からみた課題である。

今回、多くのゼミ生が参加したことで、関係づくりが大きく進んだことは間違いない。伊藤ゼミでは、いくつもの研究プロジェクトを動かしており、ゼミ生たちが協力しあっていっそうコミットしてくことを期待したい。同時に各自の研究力アップにもつながりたいと考えている。

